

現代アラブ世界における衛星放送とイスラーム復興 —宗教系放送局に焦点をあてて— Satellite Television and Islamic Revival in the Contemporary Arab World: Focusing on the Religious TV Stations

千葉 悠志
Yushi CHIBA

日本学術振興会特別研究員(PD) Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science(PD)
東京大学大学院人文社会系研究科 Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo

要旨…今日のアラブ世界では700を超える衛星テレビ・チャンネルが視聴者獲得にしのぎを削る。またこれによって放送内容の専門化・細分化も大いに進んでいる。なかでも特筆すべきは宗教系放送局の増加である。本報告では、アラブ世界の放送市場に占める宗教系放送局の割合、放送内容の多様性、さらに2011年1月以来の「アラブの春」以後の放送状況などを包括的に論じる。

キーワード アラブ世界, 衛星放送, 宗教放送, イスラーム復興, アラブの春

1. はじめに

アラブ世界はアラビア語を公用語に定め、アラブ連盟に加盟する22カ国から構成される。1990年に初のアラビア語衛星テレビ・チャンネルが現れると、アラブ世界では衛星放送が急速に人々のあいだで普及した。また人々からの強い需要によって、アラブ世界には現在500局程度の衛星放送局が存在し、そしてそれらの放送局は合計700を超える衛星テレビ・チャンネルを放送している。世界人口に占めるアラブ人口がわずか5%に過ぎないのに対し、世界の衛星テレビ・チャンネルの38%はアラブ人によって所有されている(Barata 2013: 125-126)。代表的な放送局アル=ジャズィーラは、アラブ各国の国営放送のみならず、欧米の国際放送のオルタナティブな放送になりうるものとして世界的に注目を集め、2011年1月以降のアラブ世界における大規模な政治変動（以下では「アラブの春」と記す）においても主要な役割を担ったとされる。しかし、チュニジアやエジプトでは、その後の選挙で「イスラーム政党」が躍進して最大与党になるなど、政治・社会のイスラーム化の動きが顕著にみられるようになった。こうした政治・社会のイスラーム化の動きと密接に結びつくのがイスラーム系の放送局である。アラブ世界の放送局という上述のアル=ジャズィーラなど一部有名放送局にのみ焦点が当てられがちであるが、アラブ世界の政治・社会の動向を考えるうえでは、特定の放送局に焦点をあてるだけでなく、よりアラブ世界の衛星放送局の動態を踏まえたうえで、とりわけイスラーム系の放送局を考察の俎上に置くことが必要であり、またこの動向を論じることが喫緊の課題である。

そこで本報告では以下の3点を明らかにすることを目的とする。第1に、イスラーム系の放送局が現在のアラブ世界の放送市場にどの程度のシェアを占めるかを明らかにすることである。第2に、そうしたイスラーム系の放送局がどのような放送をおこなっているのかを明らかにすることである。第3に、「アラブの春」以降、イスラーム系の放送局にどのような変化が現れたのかを明らかにすることである。方法論としては、第1に今日のアラブ世界における放送市場の実態を踏まえたうえで、アラブ世界の放送市場におけるイスラーム系の放送局の位置づけを産業論的に論じる。第2に、イスラーム系の放送局が実際にどのような放送をおこなっているのかを、実際に放送された番組の視聴・比較を通して論じる。第3に、フィールドワークをもとにして、「アラブの春」以降のアラブ世界におけるメディア状況を調査し、新たな政治状況の到来のもとでイスラーム系の放送局がどのような変化を経ているのかを論じる。

2. アラブ衛星放送市場と宗教系放送局

1990年はアラブ世界の衛星放送元年にあたる。この年の暮れにエジプト政府が国営衛星テレビ・チャンネルを開始すると、

これに続いて国営・民間問わず多数の衛星テレビ・チャンネルが現れた。1997年には、国営・民間、有料・無料を合計した衛星テレビ・チャンネル数は60程度に増加し(Lahlali 2011: 11)、その数は2000年代に入ると急増した。アラブ諸国放送連合が2010年に提出した報告書によれば、その時点までにアラブ世界の衛星テレビ・チャンネル数は733チャンネルと見積もられている(ASBU 2010)。さらに、この報告書によれば衛星テレビ・チャンネル全体の約33%は様々な番組を放送する総合チャンネルとして、そして残りの67%は特定のジャンルのみの放送をおこなう専門チャンネルとして登録されている。専門チャンネルのなかには、娯楽番組や映画、スポーツ、宗教に特化したものなど、様々なジャンルが混在している(ASBU 2010)。

それでは、そうしたアラブ衛星放送市場において、宗教的なテレビ・チャンネルはどれほどの割合を占めているのか。先の報告書に再び従えば、現在アラブ世界では40局程度の放送局が約50チャンネル程度の「宗教専門チャンネル」を放送していることが分かる。ただし、報告書において「宗教専門チャンネル」として登録されていないものであっても、実際に調べてみると「隠れ宗教専門チャンネル」と呼びうるチャンネルが多数存在している。例えば、2002年にサウディアラビアの資本家によって設立された放送局アル=マジドは、宗教色が極めて濃い放送局として知られている。同局は現在24チャンネルをその傘下に収める巨大放送局であるが、そのうち宗教専門チャンネルとして登録されているのは2チャンネルに過ぎず、残りのチャンネルは、総合チャンネルや子供向けの専門チャンネルなどで登録がおこなわれている。アル=マジドの例からも分かるように、現在のアラブ世界では、単に統計上には現れないイスラーム的なメディア空間が広範に広がっている。

こうした宗教専門チャンネルや隠れ宗教専門チャンネルなどを、ここで「宗教系衛星チャンネル」と総称すれば、それらがアラブ世界で多数現れた理由はなにか。まず、2000年前後からアラブ世界で衛星の打ち上げが相次いだことで衛星ビジネスへの参入コストが大いに低下していたことを指摘しておく必要があるだろう。また、1970年代以降のイスラーム復興によって、宗教系衛星チャンネルに対する人々からの需要が存在していたことをそもそもの要因だとして指摘する見方もある。さらに、サウディアラビアやモロッコ、さらにイラクなどでは、政府が自らの宗教的な正当性を示すことを目的として、宗教系衛星チャンネルを開始したことも大きな理由として指摘できよう。しかし、現在の衛星放送市場を考えた場合、以上のような理由に加えて、宗教系衛星チャンネルそれ自体が、メディア・ビジネスとして成立したことが大きな理由として指摘できる。とくにその契機となったのは、1998年開始のイクラアであった。イクラアは、サウディアラビアの資本家サーリフ・カーミルが所有するアラブ・ラジオ・テレビジョン (ART) 放送局傘下のチャンネルの一つであり、無料の宗教専門チャンネルとして開設された。2000年以降には、エジプトの説教師アムル・ハーリドがイクラアに登場し、大変な人気を博した。アムル・ハーリドはこれをきっかけに、アラブ世界で広く人気を博すようになり、アメリカの「タイム」誌が選ぶ2007年度の世界の「影響力ある100人」の1人に選ばれた。彼が出演するテレビ番組は、その後DVD化がなされるなどしており、イクラア自体も宗教専門チャンネルとしては異例の人気を博した。イクラアの成功は、宗教専門チャンネルがビジネスとしても成立可能であることを示し、これに続くようにアラビア語の宗教専門チャンネルが次々と開始された。そして、宗教専門チャンネルが多数現れると、それぞれの放送局・放送チャンネルのあいだの競争に拍車がかかり、各放送局・各放送チャンネルは様々なビジネス・モデルを生み出すようになった。

3. イスラーム的放送空間の拡大と深化

今日のアラブ世界には、様々な宗教系衛星チャンネルが存在しているが、その大多数はサウディアラビア系の放送局とみられている(Tantawi 2012: 111)。それでは、サウディアラビアの影響力が強い宗教系のチャンネルではどのような放送がおこなわれているのか。例えば、アル=マジド・アル=クルアーンやアル=マジド・アル=ハディースのような、クルアーンやハディースの詠唱のみを繰り返し流すようなチャンネルが存在しているのに加えて、近年では以下のような2つの異なるタイプの宗教系衛星チャンネルが現れた。1つ目は、比較的穏健なメッセージを放送する「現代版サラフィー・チャンネル」¹(Galal 2012)と呼ばれるものであり、先に挙げたイクラアや同じくサウディアラビア資本のアル=リサーラなどがこれにあたる。「現代版サラフィー・チャンネル」には伝統的なイスラーム教育を受けていない非ウラマー²系の説教師が登場し、現代的な生活とイスラームとの調和を語るなど、主に中上流階級の視聴者が好むような番組製作が特徴としてみられる。それまでの国営放送でおこなわれていたような、伝統的な宗教指導者であるウラマーたちがモスクで語った説教がお茶の間に流れるものとは異なり、イクラア

¹ サラフィーとは初期イスラームの時代を優れた模範として、そうした初期イスラーム時代の理想的な原則や精神への回帰を志向する思想をもった人々を意味する言葉である。

² ウラマーとは「知識をもつ者たち」を意味するアラビア語であり、とくにイスラーム的な知識を習得した知識人を意味する。

ではどちらかといえば対話形式の番組が多数みられる。またウラマーのみならず、スーツ姿の知識人や女性が番組中に出演し、イスラーム的に見て正しい生き方について語るなど、視聴者にとって親しみやすい内容となっている。

しかし、こうした「現代版サラフィー・チャンネル」とは一線を画した宗教系衛星チャンネルが2002年以降に現れた。これが2つ目にあたる「純粋なサラフィー・チャンネル」(Najjar 2012)であり、このなかには先に触れたアル=マジド系の諸チャンネルや、アル=ラフマ、アル=ナースなどが含まれる。「純粋なサラフィー・チャンネル」の主な支持母体としては「現代版サラフィー・チャンネル」には飽き足らない人々であり、より厳格な宗教実践などを求める人々である。とくにエジプトなどの文脈で考えた場合には、「純粋なサラフィー・チャンネル」は低所得層の人々のあいだで、また地方のような保守的な地域で人気を博していると考えられる(Sayed 2009: 21-22; Sayed 2010)。例えば、こうした「純粋なサラフィー・チャンネル」に先鞭をつけた放送局であるアル=マジドは、元々宗教出版物を扱う出版社を母体としており、音楽の使用を控え、女性をテレビ画面上に出来るだけ映さないなど、イクラアやアル=リサーラと比べると明らか違いがみられる。アル=マジドは、こうした厳格なイスラーム実践を支持する人々に支持され、現在ではサウディアラビアのみならず、エジプトやヨルダンなどにも放送拠点を有するまでに拡大した(Kraidy and Khalil 2009: 72)。また、2006年にエジプトで開始された宗教専門チャンネルのアル=ナースは元々サウディアラビア人の投資家によって開始された娯楽チャンネルであった。しかし、アル=ナースは娯楽チャンネルとしての事業に失敗したのち「純粋なサラフィー・チャンネル」として再出発し、それによって一気に知名度を高めた。

さらに近年では、宗教系チャンネルが増加したこともあって、「純粋なサラフィー・チャンネル」のなかにも、他のチャンネルとの差異化を図ろうとするチャンネルが現れ始めている。例えば、2008年に開始されたアル=ハーフィズやアル=アウターンなどは、「純粋なサラフィー・チャンネル」寄りのチャンネルではあるが、女性のアバーヤ³着用を条件に、女性のテレビ画面への登場を認めるなど、女性視聴者の取り込みを図っている。今日のアラブ世界にはこうした多数の宗教系衛星チャンネルが存在し、またそれに準じた宗教関連チャンネルも多数存在している。それゆえ、多くのチャンネルは視聴者を獲得すべく、放送内容の差異化を図り、対象とする視聴者に合わせて放送内容を決定している。しかし、こうした多様なチャンネルが存在し、そして多様な番組が放送されようとも、それらのチャンネルが総じてイスラームを語っていることの意味は重要だと言えよう。多くのチャンネルがイスラームを取り上げて論じることによって、人々はイスラームが社会や個人にとっての重要なアジェンダであることを認知することになる。今日のアラブ世界では、衛星チャンネルの登場とその普及を通じて、そこには多様性を帯びたイスラーム的な空間が広く広がっている。

4. 「アラブの春」と宗教系放送局——チュニジアの事例から

2011年1月14日、チュニジアのベン・アリー大統領がサウディアラビアへと亡命したことで、23年間の長期「独裁」政権に終止符が打たれた。この政権の打倒へと至る一連の軌跡は通称「ジャスミン革命」として知られる。それから11日後の1月25日には、エジプトでも大規模なデモが起り、2月11日には29年間続いたエジプトのムバーラク政権が崩壊した。余波は周辺のアラブ諸国へと伝わり、アラブ世界の国々では総じて大規模な政治的変化がみられた。現在まで続くこうした一連の動きは通称「アラブの春」として知られ、現在でも定まらないその行方は世界的にも大きな注目を集めている。

「アラブの春」をとくにメディアとの関係で考えた場合、当初よりインターネットやスマートフォンの役割が注目を集めた。とくにフェイスブックが人々の動員において大きな役割を担ったことから、エジプトやチュニジアでの「革命」を「フェイスブック革命」と呼ぶような傾向もみられた。だが、それとともに衛星放送のような既存のメディアが果たした役割もインターネット以上に重要であった。というのも、衛星放送がチュニジアやエジプトなどにおけるデモを大々的に取り上げ、さらに他国でのデモが生じる様子をセンセーショナルに報じたことから、インターネットを頻繁に利用しない人々に対しても、争点となっているアジェンダが何かを知らしめる働きをしていたからである。また激しいデモの様子をリアルタイムで報じたテレビ画面を通じて、熱狂や興奮が伝わったことも大きく、その際にアル=ジャズィーラやアル=アラビーヤ、またアラブ以外の放送局ならばイギリスのBBCアラビックなどの大手放送局が果たした役割は看過しえないものであった。

ところで「革命」が生じたチュニジアやエジプトでは、その後の選挙でムスリム同胞団系の政党が最大与党になるなど、政治・社会のイスラーム化が顕著となった。こうしたイスラーム化の動きと宗教系衛星放送局の動向とは密接な関係にある。

「アラブの春」以後のアラブ世界の動向を考えるうえでも宗教系放送局の動向を論じることは重要であり、そこで最後に「革命」後のチュニジアを事例として同国における宗教系放送局の動向を論じてみたい。

³ 女性の顔以外をすっぽりと覆う衣装。

「革命」前のチュニジアでは、国営放送局がチュニス7とチュニス21を、民間放送局のネスマとハンニバルがそれぞれ放送をおこなっており、計4チャンネルの放送がおこなわれていた。また政治的理由からイギリスに拠点を置いたチュニジア系のテレビ・チャンネルが2チャンネル（アル=ヒワール、アル=ムスタキッラ）存在し、チュニジア人を含めたアラブ諸国を対象に放送をおこなっていた。しかし、「革命」後のチュニジアでは民間放送局に対する規制が緩和され、新規放送局が次々と現れたほか、アル=ヒワールがイギリスからチュニジアに拠点を移すなどしている。それにより、2013年2月時点ではチュニジア系の衛星テレビ・チャンネル数は合計17チャンネルと「革命」以前の3倍近くにまで増えた。このなかでも、例えばアル=ザイトゥーナやアル=カラム、アル=ムタワシトゥ、アル=インサーンなどはイスラーム政党であり最大与党のアル=ナハダ系のチャンネルとして新たに現れたものである。これらの放送内容にはイスラームの傾向が強くなり、そしてアル=ナハダへの支持を打ち出している。またそれまでベン・アリー時代には政治的な内容を放送できなかったネスマやハンニバルなどの民間放送局も、現在では放送内容の一定時間を政治的内容に充てるようになっており、とくに世俗的傾向が顕著なネスマとは異なり、ハンニバルなどはイスラーム的な放送内容を好んで放送し、チュニジア国内で広く人気を博している。このように、ベン・アリー政権下では放送が禁じられていた民間放送局が次々と現れるなかで、イスラーム系の宗教系放送局も現れ、従来の世俗的な放送に対して不満を募らせていた人々に対して、イスラーム的なオルタナティブを提供するようになった。

5. おわりに

冒頭に述べた問いに対する結論を述べたい。1つ目は、現在のアラブ世界の放送市場が多数の放送局の登場によって競争原理が強く働くようになったことから、こうした熾烈な競争環境を生き抜くために、イスラーム系の放送局は様々なビジネス戦略を生み出していることが分かった。また、アラブ諸国放送機構の統計などからは、現在アラブ世界では40局程度の放送局が約50チャンネル程度の「宗教専門チャンネル」を放送していることが分かるが、実際には「宗教専門チャンネル」として登録されていない「隠れ宗教専門チャンネル」ともいべきチャンネルが多数存在し、統計上には表れにくいイスラーム的なメディア空間が現在のアラブ世界で広範囲に広がっている。2つ目は、イスラーム的なメディア空間の拡大とともに、放送内容の専門化（あるいは細分化）が進んでいることが明らかとなった。各々の放送チャンネルの番組傾向を分析した場合、厳格な宗教実践を求めるチャンネルとともに、よりポップな内容を放送する穏健なチャンネルが存在するなど、今日のアラブ世界には多様な宗教系衛星チャンネルが存在している。近年では益々多くの宗教系衛星チャンネルが現れ、各宗教系衛星チャンネルは他チャンネルとの差異化を図ろうと様々な試みをおこなっている。3つ目は、2011年以降のアラブ世界ではメディアに対する規制緩和が進み、とくに「革命」が生じたチュニジアを例にとると、新規放送局が多数現れ、イスラーム的な放送をおこない最大与党アル=ナハダを支持する宗教系衛星チャンネルが存在していることが分かった。アラブ世界の宗教系衛星チャンネルの動向はアラブ各国における政治的な動きとも密接に関わるものであり、今後もこうした動きを注視していく必要があるだろう。

参考文献

- 1) ASBU (Arab State Broadcasting Union). 2010. *Al-Bath al-Fadū' i al-Arabi: al-Taḥīr al-Ṣanawī al- 'Am 2010* (Online Document).
- 2) Barata, J. 2013. Tunisian Media under the Authoritarian Structure of Ben Ali' s Regime and After, In Tourya Guaybess ed., *National Broadcasting and State Policy in Arab Countries*. New York: Palgrave Macmillan, 117-130.
- 3) Galal, E. 2012. 'Modern' Salafi Broadcasting: Iqra' Channel, In Khaled Hroub ed., *Religious Broadcasting in the Middle East*. London: Hurst & Company, 57-79.
- 4) Kraidy, M. M. and Kahlil, J.F. 2009. *Arab Television Industries*. New York: Palgrave Macmillan.
- 5) Lahlali, M. 2011. *Contemporary Arab Broadcast Media*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 6) Najjar, A. 2012. 'Pure' Salafi Broadcasting: Al-Majd Chennel, In Khaled Hroub ed., *Religious Broadcasting in the Middle East*. London: Hurst & Company, 35-55.
- 7) Sayed, M. 2009. Religious Islamic Satellite Channels: A Screen that Leads You to Heaven, *Reuters Institute Fellowship Paper*; University of Oxford (Online Document).
- 8) Sayed, M. 2010. Screen to Heaven, In *al-Ahram Weekly Online* (4-10 March, 2010).
- 9) Tantawi, O. 2012. 'Modern' Preachers: Strategies and Mixed Discourses, In Khaled Hroub ed., *Religious Broadcasting in the Middle East*. London: Hurst & Company, 103-125.